

■ 書 評



抗精神病薬完全マスター

中村 純 編
 医学書院
 2012年3月
 240頁, 定価 6,090円

本書のねらいは、最近続々と臨床応用可能となった抗精神病薬を、われわれ臨床医がどのようにすれば上手に使いこなせるかについての、いわばノウハウを結集することにあつたようである。その意味でも本書の執筆陣は、みなその道のエキスパートであり、本書は安心して勉強できる優れた内容となっている。

さて、現在の統合失調症の症状分類は、陽性-陰性の2分法が主流となっており、あるいはせいぜいこの2分法の垂流的分類法が基本的となつてはいるが、この分類法をそのまま臨床現場で応用しても、未だに問題点が多く、適用しにくい場合が多い。臨床の第一線で患者と日々悪戦苦闘している臨床医の大多数も、この分類法を構造論的にも、また全体論的見地からも不十分なものであると感じながら患者に対峙しているものと考えられる。また最近「統合失調症の認知障害」が声高に叫ばれる事態となり、これまでに抽出されているこの「統合失調症の認知障害」とは、統合失調症患者にみられる知覚の組織化、選択的注意や注意の維持、記憶特に長期記憶の再生、実行機能などの障害を意味し、本疾患の基本障害はこれらの認知障害であり、これらは発病前から存在し、症状軽快後も持続するので、本疾患の脆弱性あるいは素因との関連の検討が必要な“障害”であるとされる。本書の中心課題である抗精神病薬は、様々な精神病症状、とりわけ統合失調症を中心とした精神病に使用される場合が多く、さらにまた最近では統合失調症以外の疾患や症状に対しても用い

られるようになっている。本書の第6章には、双極性障害やうつ病、あるいは強迫性障害などへの投与方法や研究成果が詳述されている。

また本書の第4章には、クロザピンやリスペリドン、オランザピン、クエチアピン、アリピプラゾール、ペロスピロン、プロナンセリンの順に、これらの薬理学的作用機序や薬物動態などが要領よくまとめられている。さらに本書にはそれぞれの項に「臨床ケース」として、実際の医療現場での投与方法やその注意点などがわかりやすく記載されており、臨床医にとっては親しみやすい、プラクティカルな内容となっている。

さらに筆者が最も気に入った本書の特徴は、各薬剤ごとに「臨床上的ヒント・注意点」が記載されていることである。たとえばアリピプラゾールの項を担当執筆された吉村玲児先生たちは、高プロラクチン血症や体重増加についての本剤の特徴をピタリと記述しているし、プロナンセリンの項では、天神朋美先生たちが、その鎮静作用の特徴から、他剤への切り替え時の注意点について丁寧に解説されている。また本書の第1~3章にはそれぞれ抗精神病薬の「臨床的位置づけ」や「開発の歴史と展望」、および「過去、現在、未来」が、わが国のこの方面のリーダーである先生方により、要領よく纏められている。

さて、全体を精読して筆者が感じた想いは、抗精神病薬が精力的に研究されてきているばかりか、さらに新たな開発が次々と進められているが、患者さんや家族の願望を十分に満足させるほどまでには、もうひとつ、あるいは、まだまだ至っていない、といったことである。それはおそらくは多くの臨床医が日常臨床で薬物療法に期待している内容と共通すると思う。本書のある文中に「21世紀に生きるわれわれが当たり前と思っている現在の薬物療法も50年後には大きく変化している可能性も否定できない」と記載されていることにも通じる。本書が多くの臨床医に読まれ、新たなステップを考えるヒントが生まれることを期待する。(堀口 淳)